

うち日さす宮の我が背は

渡部 和雄

—

東歌に、

三四五七 宇知日佐須美夜能和我世波夜麻等女乃比射麻久其登尔安乎和須良須奈
という歌がある。

『注釈』では、

うち日さす宮の吾が夫は大和女の膝枕く毎に吾を忘らすな
と訓んで、次のように口訳している。

宮仕をしてゐる私の夫は、大和女の膝を枕にする度に、私を忘れては下さるな。
と、いわば素直な訳である。

『古典集成』では、

うちひさす宮の我が背は大和女の膝まくごとに我を忘らすな

と訓んで、

宮仕えされるあなたは、大和の女の膝を枕にする時でも、そのたび私のことをお忘れになったりしないでね。

という。一層素直な訳になっている。

訳文二例をあげたのは、それによつて解釈も違つたものになろうと思つたからである。「吾が夫」とすれば、この歌は夫婦間に置かれ、「我が背」とすれば、幅広い男女関係の歌になるだろうと思われる。口訳では、

「私の夫は」「膝を枕にする度に」

「あなたは」「膝を枕にする時でも」

で、余り差異はないようであるが、見る角度によつては、もつと別な状況の歌になる。

『代匠記』 此ハ男ノ宮仕ニ都へ上リタル其妻ガ歌ナリ。依テ宮ノ我背ト云」

『評釈』 恐らく衛士であらう」

『全注』 夫は仕丁や衛士などとして都に上り、宮廷に仕えているのであろう。これから宮仕えに出る夫とも、既に宮仕えに出て都にいる夫ともとれる。大和へ帰る官人、京から下つた官人ではあるまい」

というが、

『全訳注』では「衛士として上京する男や、帰京する官人」

といている。ところで『注釈』の「考」に、

全註釈に「宮のわが夫といふ言ひ方は、新に兵士などになつて行く男をいふのではなく、京から下つて来た役人をいふのだらう」とし、

庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな（四・五二一）

をあげ、「常陸の娘子が、藤原宇合の京に上るのに贈った歌だが、それと同様の歌である」とあるが、私注に「ワガセといふ表現は、近親感を強くあらはすものであらうから、やはり東国人である夫が上京した場合と見る方が自然であらう。下向の京人に、かりそめに接するものの言葉とは感じられない」とし、「京より下向の人に対する歌とすれば、三四句は、当然すぎることで、取り立てて言ふのは、反って不自然に感ぜられる」とも言はれてゐるやうに、「大和女の」といふ言ひ方は……男の妻ではなく、「あだし女」と見るべきものと、委曲をつくすように考察する。

歌人・土屋文明が〈ワガセという表現は親近感を現わすから、夫であらう〉と考えた。それを国文学者・沢瀉久孝は受け入れた。昔は歌人（文学）と学者の間に親密さがあつたらしい。「大和女」は「あだし女」になつた。

『東歌疏』では、

宮廷の大番に出てゐる男を「みやのわがせ」と言つた古風な新しい言ひ方は、注意すべきだ。

といつて「宮の我が夫」の処置に困っている。で、〈つくしなるにほふ子ゆゑに……〉と裏表をなすという風に理解する。土屋、沢瀉、折口などの文人は、作者（妻）が夫と遊女との上を詠んだと解釈した。この解釈は尾をひくだろう。

さて『全註釈』の「訳」では、

日の輝く御殿にお勤めになるあなたは、大和女の膝を枕にするたびに、わたくしをお忘れなさいますな。であつた。これも至極素直な訳である。

『東歌解釈』（新藤知義）

『大系』も大体同意見であるが、しかし「京から下ってきた役人」をつかまえて東女が「ワガセ」と呼ぶのはしつくりしないので、夫を宮の奉仕に上らせた東国の女の感慨と見るべきであろうと思う。

○ヤマトメノヒザマクゴトニアヲワスラスナ―浮気は仕方がないが、わたしのことを忘れないでくれと願うところに、女心のあわれさがある。

という風にもなつてこよう。

『釈注』　うちひさす宮に仕えるあなたは、大和女の膝を枕にすることもありましようが、度重なるにつれて、私のことを忘れるなんていうことがないようにして下さいね。と、「度重なるにつれて」を入れてある。その上、「意の取りにくい歌。だが、およそこんなところだと思う。」と苦勞の様子がある。加えて『全註釈』も「我が背」の用法から見て賛成しなが、この表現の特異性に注目した感覚は貴重、という風に言っている。

で、大和女は「あだし女」で、「さうしたことが度重なるにつれて……といふ不安なのである」という『注釈』を引くことになった。

たしかに、この歌で、「我が背」という表現は大きな役割を持つていらしい。そして、たしかに〈京より下向の人〉〈京に上る官人〉などに対しては「君」を使うのかも知れない。また「忘る―な」という表現は人の（当面は男女の）離別を基盤にしているだろう。歌に於ては送別の歌に生起する。

次巻の巻十五を使つてみると、

新羅に遣はさえし使人等、別れを悲しびて贈答し、また海路にして情を働みして思ひを陳べ、并せて所に当りて誦ふ右歌

にみられる〈対称〉は次の様である。

三五七八 君を離れて恋に死ぬべし

三五七九 大船に妹乗るものにあらませば

三五八〇 君が行く海辺の宿に

三五八二 大船を荒海に出だします君

三五八三 ま幸くて妹が斎はば

三五八五 我妹子が下にも着よと

三五八七 袴袢新羅へいます君が目を

三五八九 妹が目を欲り

三五九〇 妹に逢はずあらばすべなみ

三五九一 妹とありし時はあれども

三五九二 妹もあらなくに

三五九四 悔しく妹と別れ来にけり

三五九六 我妹子が形見に見むを

三六〇三 ゆゆしき君に恋ひわたるかも

三六〇四 妹が袖……一日も妹を

三六一四 帰るさに妹に見せむに

三六一五 我がゆゑに妹嘆くらし

三六一六 我妹子が嘆きの霧に

三六三三 栗島の逢はじと思ふ妹にあれや

三六三四 見れば恋しき妹を置きて来ぬ

三六四五 我妹子は早も来ぬか

三六四七 我妹子がいかに思へか

三六五〇 我が思ふ妹に逢はぬころかも

三六五一 八十島が上ゆ妹があたり見む

三六五六 君が御船の綱し取りてば

三六五七 年にありて一夜妹に逢ふ

三六五九 我妹子はいつとか我れを

三六六〇 間なくや妹に恋ひわたりなむ

三六六三 妹が待つらむ月は経につつ

三六六五 妹を思ひ寐の寝らえぬに

三六六六 我妹子が解き洗ひ衣

三六六七 妹が衣の垢つく見れば

三六六九 闇にや妹が恋ひつつあるらむ

三六七一 家なる妹に逢ひて来ましを

三六七八 妹を思ひ眠の寝らえぬに

肥前国松浦郡の狛島の亭に船泊りする夜に、海浪を遙かに望み、各旅の心を働みて作る歌七首

三六八一 帰り来て見むと思ひし我がやどの秋萩すすき散りにけむかも

右の一首、秦田麻呂

三六八二 天地の神を乞ひつつ我待たむはや来ませ君待たば苦しも

右の一首、娘子

は使人(秦田麻呂)と遊行女婦の歌である。

ここでもう一例、同様な趣の所を先にあげてみると、

竹敷の浦に船泊りする時に、各心緒を陳べて作る歌十八首

三七〇〇 (大使)

三七〇一 (副使)

三七〇二 (大判官)

三七〇三 (少判官)

三七〇四 もみち葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ船のにはひにめでて出でて来にけり

三七〇五 竹敷の玉藻なびかし漕ぎ出なむ君がみ船を何時とか待たむ

右の二首、対島の娘子、名を玉槻といふ。

これらは当然、停泊地における遊宴送別歌といったところである。表現されている「君」は送別歌における娘子から官人へのものである。これまで「妹」が頻出するものを見たが、それは新羅使人等の歌であるから当然でもある。いわば使人からは女は「妹」と呼ばれ、女からは官人達は「君」と呼ばれている。

三六八三 君を思ひ我が恋ひまくは

三六八五 妹が待つべき月は経につつ

三六八六 家にある妹し思ひ悲しも

三六八七 都に行かば妹に逢ひて来ぬ

壱岐島に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去せし時に作る歌一首并短歌

三六八八 韓国に渡る我が背は

荒き島根に宿りする君

三六八九 石田野に宿りする君

三六九〇 君にやもとな我が恋ひ行かむ

三六九一 人の嘆きは相思はぬ君にあれやも

三六九二 高々に待つらむ君や

三六九三 君を待つらむ人しかなしも

は挽歌で使人等が宅満の死を悼んでゐる。ここに「我が背」という表現がある。

三六九八 妹そ遠くは別れ来にける

三七〇一 我妹子が待たむと言ひし

三七〇五 前掲、君が御船を

三七一二 ぬばたまの妹が乾すべく

三七一三 我妹子が待たむと言ひし

三七一四 秋されば恋しみ妹を

三七一七 我妹子が結びし紐は

三七一八 我が恋ひ来つる妹もあらなくに

三七一九 妹に言ひしを年の経ぬらく

三七二〇 我妹子を行きてはや見む

と、以上のように「君」「妹」の対応が原則のようにあると見ていい。官人への呼称は「君」であった。

三五七八 武庫の浦の入江の洲鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし

は、例えば『集成』は「夫に贈る妻の歌」とある。妻女でも、贈る側一般でも、遊行女婦でも、送別行事の中では「君」と表現される。

三六八〇 君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ

は、うますぎるほどまい。形式、音調の完成といった感じも与える。送別儀礼と遊行女婦の共調性によるのではないか。

三五八七 袴袈新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ

も上三句、下二句がうまく整っている。送別儀礼の形が良く現われていよう。

さて、巻十五の後半は、

中臣朝臣宅守と、狭野弟上娘子との贈答歌とあるもので、これは夫婦の関係でもある。

三七二三 あしひきの山道越えむとする君を心に持ちて安けくもなし

三七二四 君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ばさむ天の火もがも

三七二五 我が背子しけだし罷らば白袴の袖を振らさね見つつ偲はむ

と、「君」「背子」の両方を使っている。これは目録「夫婦」によるいわゆる〈親近性〉の証拠になるものかも知れない。全体では、三七四九 君 三七五〇 君 三七五一 背子 三七五二 君 三七六八 君 三七六九 君 三七七〇 君 三七七一 君 三七七二 君 三七七三 君 三七七四 背 三七七七 君 三七七八 背子
という状態である。条件というか環境によっては「君」「背子」の両方を使っても良かったということはある。

東歌の「君」と「背」、

三五〇	君が御衣し	三六三	我が背子を
三六二	君が名かけて	三七五	背子に逢はなふよ
三六五	君が悔ゆべき	三七九	我が背子を
三七四	告らぬ君が名	三九九	杳はけ我が背
三七七	君がまにまに	四〇二	背なのが袖も
三八八	息づく君を	四〇五	背なは逢はなも
四四〇	君し踏みてば	四四四	背なと摘まさね
四四三	逢へる君かも	四四五	刈り来我が背子
四四八	君が齢もかも	四五五	来ませ我が背子
四七〇	君待ちがてに	四五七	宮の我が背は
四七五	隠れし君を	四五八	汝背の子や
四九三	君をし待たむ	四六〇	我が背を遣りて
四九五	君が来まさぬ	四六三	逢へる背なかも

四九八 君は忘らす

四六九 我が背なは

五〇六 穂に出し君が

四八三 我が背なに

五一四 君に付きなな

五三六 いかなる背なか

五二一 来まさぬ君を

五四四 背ななと二人

五二八 ともしき君は

五四八 かなしけ背子に

五五八 君も逢はぬかも

五四九 かなしき背子が

五六一 君をと待とも

五六八 君が弓にも

防人歌では、

三五二 からまる君を

四二五 行くは誰が背と

『万葉集東歌防人歌』

四一六 旅行く背なが

「ここは妻をさす」

四二二 わが背なを

四二四 背なが衣は

四二六 いませ我が背な

四二八 我が背なを

四二三 背子がまき来む

防人歌は、いわば送別儀礼の歌である。送る側（妻など）からの表現はすべて「背」である。四四三二と四四二八（昔年防人歌）の伝習性、形式性からみて、「背な」は送る側からの定称であつたと見ていい。

こうした状況をもう少し拡げてみる。

国の掾久米朝臣広縄、天平二十年を以て、朝集使に付きて京に入る。その事畢りて、天平感宝元年閏五月二十七日、本任に還り至る。

(大伴家持)

四一一六 ……都辺に参ゐし我が背を……嘆きつつ我が待つ君が……

では、「我が背」と「君」が両存している。この「都辺に参ゐし我が背」という表現は「宮の我が背」に似ている。また、

西海道節度使判官佐伯宿祢東人の妻(め)、夫君(せのきみ)に贈る歌一首
 というのがあり作者は妻、相手は夫である。

六二一 間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君(客有公)が夢にし見ゆる
 こうした「君」は公的、儀礼的な表現として詠まれたことを示すのかも知れない。

神亀元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に、従駕の人に贈らむがために、娘子に詠へられて作る歌一首并短歌
 笠朝臣金村

五四三 大君の行幸のまにまもののふの八十伴の男と出で行きし愛し夫は(愛夫者)天飛ぶや輕の路より玉だすき畝
 傍を見つつあさもよし紀伊道に入り立ち真土山越ゆらむ君は(公者)黄葉の散り飛ぶ見つつにきびにし我は思はず草
 枕旅をよるしと思ひつつ君は(公者)あるらむとあそそにはかつは知れどもしかすがに黙もえあらねば我が背子が
 (吾背子之)行きのまにまに追はむとは千度思へどたわやめの我が身にしあれば道守の間はむ答へを言ひ遣らむすべ
 を知らにと立ちてつまづく

反歌

五五四 後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背の山にあらましものを

五五四 我が背子が跡踏み求め追ひ行かば紀伊の関守い留めてむかも

この〈娘子〉の中味ははつきりしない。対象を「愛夫」「公」「吾背子」と表現している。あるいはこの表現は笠金村によつて保証されているとも言える。

このように少い例を見ても送る側（官人の場合も、家族（妻）の場合も、また娘子という場合もある）から相手は「君」「我が背（子）」と呼ばれることが、そう例外ではなかつたろうと推測される。

二

あるいは右の笠金村の歌などは、〈娘子〉という存在があつて、その娘子が男（官人）などに書く手紙の範例をなしているのではないか。娘子はそうした教養の上に立つて官人への歌を詠んだ。上にあげた、

竹敷の浦に船泊りする時に、おのおの心緒を陳べて作る歌十八首（の中）

三七〇四 もみち葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ船のにはひにめでて出でて来にけり

三七〇五 竹敷の玉藻なびかし漕ぎ出なむ君がみ船を何時とか待たむ

右の二首は対島の娘子。名は玉槻。

には、『集成』に「現地の遊行女婦が一行を歓迎する挨拶の歌」とある。

この娘子の存在がどうやら送別儀礼歌には非常に大きいものがあると思われる。

先に全註釈があげた、

藤原宇合大夫、遷任して京に上る時に、常陸娘子が贈る歌一首

五二一 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな
も、まさに「常陸娘子」と上京官人の関わりの歌である。

『全集』では、「宇合が常陸国守として在任中に娶った女か」

という。ただここで、「常陸娘子」と「東女」は少し次元が違っていよう。即ち常陸娘子が〈現地妻である私を〉〈遊行女婦である私を〉といっているのではなく、表現上は〈東女を〉といっているのである。

で、その東国女である作者（詠者）が「大和女」と表現したら、必ずしも「あだし女」などでもなくもいいのではないか。表現の内容は、大和の女、都の女性でよいのではないか。

「遊行女婦」と書かれている歌もある。

ここに、摘む雪に重巖の起てるを彫り成し、奇巧みに草樹の花を綵り発す。これに属けて掾久米朝臣広縄の作る歌一首

四三三一 なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも

遊行女婦蒲生娘子の歌一首

四三三二 雪の山斎巖に植ゑたるなでしこは千代に咲かぬか君がかざしに

とある。天平勝宝三年正月二日に守の館に集宴。三日に介の館に会集して宴楽。その時に「ここに、積む雪に」とあるわけである。そうした宴席に遊行女婦が出席していたわけである。思えば、万葉集とは宴歌なのである。

左註に出てくる例は、

冬十二月、大宰師大伴卿の京に上る時に、娘子の作る歌

九六五 凡ならばかもせむを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも

九六六 大和道は雲隠りたり然れども我が振る袖をなめしと思ふな

右、大宰師大伴卿、大納言を兼任し、京に向かひて道に上る。この日に、馬を水城に駐めて、府家を顧み望む。

ここに、卿を送る府吏の中に、遊行女婦あり、その字を児鳥と曰ふ。……

と状況は明瞭である。送別側府吏の中に娘子がいた。送別儀礼歌の環境で右様の構図は重要であると思われる。そして、註記に、

四一〇六 ……左夫流その児に

四一〇八 里人の見る目恥づかし左夫流児にさどはす君が宮出後姿

この左夫流というのは「遊行女婦の字なり」と註されている。

先妻夫君の喚ぶ使ひを待たずして自ら来る時に作る一首

四一一〇 左夫流児が斎きし殿に鈴掛けぬ駅馬下れり里もとどろに

大伴家持

この「斎きし殿」について『注釈』では、

左夫流児が大切にかしづいてゐた御殿

とし、『全集』では、

トノは宮殿。ここは左夫流児の家を皮肉にいった。

という。遊行女婦は〈家〉を持っていた。あるいは集団で館を持っていた。この、男が通う建物があった、という構図は、他の歌の解釈の場合にも重要なことになるかも知れない。

トノといわれてもいい程の、案外立派な建物。国府御用達のような趣。たとえば東歌

三四三五 恋しけば来ませ我が背子垣つ柳末つまからし我立ち待たむ

三四六九 夕占にも今宵と告らる我が背なは何故そも今宵寄しろ来まさぬ

三四八三 昼解けば解けなへ紐の我が背なに相寄るとかも夜解けやすけ

三五三六 赤駒を打ちてさ緒引き心引きいかなる背なか我がり来むと言ふ

三五四九 多由比潟潮満ち渡る何処ゆかも愛しき背子が我がり通はむ

など、宴歌の《誘い歌》でもありえたらう。少なくともこれらの歌に新しい展開を示せよう。

遊行女婦の拠点を中心とする時は《誘い歌》の様相を示すが、別離、送別の場合は当然《忘る》という言葉を中心
に表現される。

まさに防人歌はそうなのであるが、

四三二二 我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

右の一首、主帳丁麿玉郡の若倭部身麻呂にみられるように「忘れず」というのは防人自身の言葉であつて残る
家族（妻）の《忘るな》という言い方はない。

四三四四 忘れせぬかも 防人

四三四六 忘れかねつる 防人

四三五四 忘れせぬかも 防人

四三五五 忘れえぬかも 防人

四三七八 忘れせなふも 防人

四四〇七 忘れえぬかも 防人

という風で〈忘る〉は防人から表現である。相手は妻である。これは防人歌の構造が防人と家族（妻）の関係になっているからであろう。

官人の送別宴歌では送る側から歌いかけ、旅行く者が答える形になっている。対して防人歌では、例えば、
四四二三 足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

右の一首、埼玉郡の上丁藤原等母麻呂

四四二四 色深く背なが衣は染めましをみ坂給らばまさやかに見む

右の一首、妻の物部刀自売

のように防人↓妻という編集になっているし、発想も防人が先で、妻はそれに答える歌を詠むようになってい。これは防人制度、国家の体制に似ているのだろう。

防人歌には家人（妹）が忘れる歌がある。

四三六七 我が面の忘れもしだは筑波嶺を振り放け見つつ妹は偲はね

右の一首、茨城郡の占部小竜

というものである。そして送る側は〈忘る〉を詠わない。東歌に、

三三九四 さ衣の小筑波嶺子の山の岬忘ら来ばこそ汝を懸けなはめ

という歌がある。『集成』に「山の崎を妻に見立てた歌」といつている。とにかく前提としてここには送る側からの〈忘るな〉という意志があつて「忘ら来ばこそ汝をかけなはぬ」と表現されるのであろう。

良い例として巻二十に、

上総国の朝集使大掾大原真人今城、京に向かふ時に、郡司が妻女等が銭する歌二首

四四四〇 足柄の八重山越えていましなば誰をか君と見つつ偲はむ
 四四四一 立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひ渡りなむ

「ワスレズハ」の解釈は難しいところであるが、「郡司の妻女等」の歌、送る側の一つの典型をなす歌である。送別儀礼歌である。

三三六二 相模嶺の小峰見そくし忘れ来る妹が名呼びて吾を音し泣くな

或本歌日 武蔵嶺の小峰見かくし忘れ行く君が名かけて吾を音し泣くる

両者の関係、内容共に明確ではない歌であるが、或本の方が先で本文は後と考える。即ち送る側（妹・或本）と帰京する官人（君・本文）という構造であろう。送る側は〈私を忘れて行く君〉と発想している。

社会的、生活的には忘れた方が都合がよい場合、人もあつたろう。

卷四、五三六 門部王の恋の歌一首

の左註に「右、門部王、出雲守に任ぜらるる時に、部内の娘子を娶る。未だ機だにもあらねば、すでに往来を絶つ」とある。

東国の女の送別歌に対して大原今城も藤原宇合も答歌など作つてはいない。旅人が、

九六七 大和道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思はえむかも

と和ふる歌を作っている。歌人らしい。

三四九七 海原の根柔小菅あまたあれば君は忘らす我忘るれや

の「君は忘らす」「我忘るれや」の対応が面白い。『集成』に「こは、「寝」と「柔」の意をにおわし、港の遊行女婦の譬え」という。そんなことであれば、これも娘子の送別宴歌の性質を見せていよう。女の人が多勢いるので、あ

なたは私のことなどお忘れになるでしょうが、私は忘れるものですか、という。

この内容は本論の歌に似ていると思われる。

「君」が「背」（我が背）になるのはそう難しいことではない。

二九二五 みどり子のためこそ乳母は求むといへ乳飲めや君が乳母求むらむ

二九二六 悔しくも老いにけるかも我が背子が求むる乳母に行かましものを

歌柄からみて、この男女は親しかったろう。男は自分の中に「君」と「背子」の両方を持っていた。

三三一四 ……己夫し徒歩より行けば……馬買へ我が背

反歌

三三一五 泉川渡り瀬深み我が背子が旅行き衣濡れひたむかも

或本反歌日

三三一六 また鏡持てれど我は駿なし君が徒歩よりなづみ行く見れば

三三一七 馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも我は二人行かむ

の四首は伝承的な歌なのでろう。或本反歌が男女の対応になっている。「我が背」「我が背子」「君」に差はない。案外人々はこうした歌を聞き知っていたのではないか。作歌上では「我が背子が」は、それで一句をなすが、「君」は一句を作れないようにある。

こうみてくると、「背（子）」「君」の並在はある親密な、一種特異な空間の中にある。

二十二日に、判官久米朝臣広繩に贈る霍公鳥を怨恨むる歌并短歌

四二〇七 ここにしてそがひに見ゆる我が背子が垣内の谷に……谷片付きて家居せる君が聞きつつ告げなくも憂し

反歌一首

四二〇八 我がここだ待てど来鳴かぬほととぎすひとり聞きつつ告げぬ君かも

まさに「霍公鳥怨恨歌」であるが、この家持の心情的親密さは相当のものである。そこに「我が背子」と「君」の共存の世界がある。

送別の歌では、

天平五年、入唐使に贈る歌一首（作主未詳）

四二四五 ……日の入る国に遣はさる我が背の君を……

反歌一首

四二四六 沖つ波辺波な越しそ君が舟漕ぎ帰り来て津に泊つるまで

儀礼的な歌だから用語、構想共に一般的である。ということとはまた、「我が背の君」「君が舟」という表現もそう珍らしいものではないものであつたろう。

この年、七月十七日、家持少納言に遷任。

三

「我が背子」が氾濫、あるいは流行するのは越中、家持中心の歌宴に於てである。家持の人柄だろう女性的心情、それを中にまとまる国府の官人、遊行女婦の存在、即ち遊行女婦の持つ擬似？近親性の中に「我が背子」が官人的基準を外れて保護されていた。この表現は越中以前から越中国府、帰京後も引きつづき用いられる。兵部少輔大伴家持

宅で、

四四四二 我が背子がたどのなでしこ日並べて雨は降れども色も変らず 大原今城

四四四三 ひさかたの雨は降りしくなでしこがいや初花に恋しき我が背 大伴家持

四四四四 我が背子がやどなる萩の花咲かむ秋の夕は我を偲はせ 大原今城

まるで今城と家持は恋人の関係である。他に「丹比国人真人の宅に宴する歌」(の中)

四四四七 略しつつ君が生はせるなでしこが花のみ訪はむ君ならなくに 左大臣

四四四八 あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子見つつ偲はむ 左大臣

は橘諸兄が丹比国人真人を呼んで言う言葉である。

兵部卿橘奈良麻呂の安では(追和)

四四五〇 我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも

四四五一 愛しみ我が思ふ君はなでしこが花になそへて見れど飽かぬかも

は家持が橘奈良麻呂に対する表現であるが、橘諸兄と丹比国人真人に対する表現、家持と奈良麻呂に対する表現。この宅宴ではこういう表現が出てくる可能性は大きかったろう。

これらは一種異様な、生ぬるさに閉じ込められた世界であるが、あるいは大伴家持の、文学(歌)を守る態勢であったのかも知れない。

天平十八年七月、家持越中赴任。

最初の歌は大伴氏坂上郎女の歌である。

三九二七 草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮すゑつ我が床の辺に

三九二八 今のごと恋しく君が思ほえはいかにかもせむするすべのなさ
と、三九二九、三〇もすべて「君」である。

ついで平群氏女郎、越中守大伴家持に贈る歌

三九三一 君により我が名はすでに竜田山絶えたる恋の繁きころかも
三九三四 なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし
三九三六 草枕被にしばしばかくのみや君を遣りつつ我が恋ひ居らむ
三九三七 草枕旅去にし君が帰り来む月日を知らむすべての知らなく
三九三九 里近く君がなりなば恋ひめやとも思ひし我そ悔しき
三九四〇 万代に心は解けて我が背子が捻みし手見つつ忍びかねつも
三九四一 うぐひすの鳴くくら谷にうちはめて焼けは死ぬとも君をし待たむ
三九四二 松の花花数にしも我が背子が思へらなくもとな咲きつつ

家持はある意味で平群氏代女郎から歌を学んだ。「八月七日の夜に、守大伴宿祢家持の館に集ひて宴する歌」。越中歌壇最初の歌。

三九四三 秋の田の穂向き見がてり我が背子がふさ手折りけるをみなへしかも
という。平群女郎と家持の歌の前後は、必ずしもはつきりしているわけではないが、家持の「我が背子」には、「万代に心は解けて……捻みし手」の女性的心情が通っているのではないか。家持の歌は女性によつて深化させられている。

この宴歌集団には国庁の官人のほかに僧も加わっている。後に別の僧（講師僧恵行）が次の様な歌を作っている。

四二〇四 我が背子が捧げて持てるほほかしはあたかも似るか青き蓋

「遊覧布勢水海」の時のものである。家持に許容された雰囲気を基にしているのだろう。

国庁は「君」たちの集団であった。そこに遊行女婦、僧が加わった宴歌集団で「我が背子」集団が形成された。一種幻視の集団？

四

さて、くり返すことになるが巻四に、

藤原宇合大夫、遷任して京に上る時に、常陸娘子の贈る歌一首

五二一 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふ

典型的な送別歌とみてよい。ここでは「君」とも「我が背子」とも言っていない。だがここには忘れ給ふながある。この「忘れ給ふな」という表現は

二五三一 我が背子とその名告らじとたまきはる命は捨てつ忘れたまふな

三七七四 我が背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな

と強烈な訴えのように表現されている。

その上、二五三一は巻十一「正述心緒」のものであるが、その付近の対称をあげると、二五二〇 君、二五二二 君、二五二二 背な、二五二四 我が背子、二五二八 我が背子、二五三一 我が背子、二五三七 君、二五三八 君、二五三九 君、

といった状態である。この辺りでは「君」と「我が背子」に理論的差はないであろう。

一八二二 我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜のふけぬとに
などの「我が背子」と「君」に差があるわけではない。

そしてもう一つ「我を―忘らす―な」という表現がある。

二七六三 紅の浅葉の野らに刈る草の束の間も我を忘らすな

三〇一三 我妹子や我を忘らすな石上袖布留川の絶えむと思へや

三四五七（本論の歌）

など見られるように、作者未詳歌群の世界では割合一般的な表現であつたのだろう。

もう一例、

三七七 人もねのうらぶれ居るに竜田山み馬近付かば忘らしなむか

は「書殿銭酒日倭歌四首」中の一首である。

前三首でも〈我ヲ〉となつてゐるから、これも忘れるのは相手の方であり、自分は従属的、受動的な立場である。

この〈我ヲ〉という内容を持つものに、

三〇六一 暁の自覚まし種とこれをだに見つついまして我を偲はせ

四四四四 我が背子がやどなる萩の花咲かむ秋の夕は我を偲はせ

などの歌が見られるが、〈我を忘るな〉という送別基盤とは環境が異なる。防人歌に、

四三六七 我が面の忘れもしだは筑波嶺を振り放け見つつ妹は偲はね

は先にあげたが、東歌に、

三五一五 吾が面の忘れむしだは国はふり嶺に立つ雲を見つつ偲はせ
と似た歌がある。共に夫（男）の歌であるが、骨格は男女共に詠える作りである。

先にあげた、「上総国の朝集使大掾大原真人今城」に関する歌に、

高田女王、今城王に贈る歌六首

という歌がある。

五三七 言清くいたくもな言ひ一日だに君いしなくは堪へかたきかも

五三八 人言を繁みこちたみ逢はざりき心あるごとな思ひ我が背子

五三九 我が背子し遂げむと言はば人言は繁くありとも出でて逢はましを

五四〇 我が背子にまたは逢はじかと思へばか今朝の別れのすべなかりへる

五四一 この世には人言繁し来む世にも逢はむ我が背子今ならずとも

五四二 常やまず通ひし君が使来ず今は逢はじとたゆたひぬらし

大原今城は「郡司妻女等銭之歌」では「君」としか呼ばれなかったが、その君が容易に「我が背（子）」でもありうることを知っていたわけである。その「我が背子」は多分、「郡司妻女等」の「等」の部分にあったのかも知れない。その部分が遊行女婦であり、多くは（娘子）として現れている。

湯原王、娘子に贈る歌二首（六三一、二）

娘子の報へ贈る歌二首（六三三、四）

六三三 家にして見れど飽かぬを草枕旅にも妻とあるがともさ

『全集』 湯原王が任地などに妻を同伴していることを羨んでいるのであろう。

としたら、この「娘子」の在り様はなんとすごいことかと推測させる。

湯原王とこの娘子のなじみは深い。その湯原王が旅先に妻（女）と一緒にいる。それを「ともしさ」と心に引きつけている表現の優しさ、歌の暖かさ。こうした心情の穏健は既に見たことがあるように思う。「我を忘るな」という所が一層奥ゆかしい？

湯原王のまた贈る歌二首

六三五 草枕旅には妻は率たれども櫛笥の内の玉こそ思ほゆれ

六三六 我が衣形見に奉るしきたへの枕を放けずまきてさ寝ませ

とまで湯原王が言えるのは、生活上は障害のなかった女に対してではないか。即ち妻に許されているほどの間柄ではなかったか。

で、娘子は素直に衣を受けとっている。

六三七 我が背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けじ言問はずとも

とはまあ、人間における至上の言語表現である。「娘子」とは神の作った、人間の最高傑作ではないか。そんな女が男を呼ぶ呼称が「我が背子」であった。

湯原王のまた贈る歌一首

六三八 ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬると心惑ひぬ

娘子がまた報へ贈る歌一首

六三九 我が背子がかく恋ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねらえずけれ

湯原王のまた贈る歌一首

六四〇 はしけやし間近き里を雲居にや恋ひつつ居らむ月も経なくに

娘子がまた報へ贈る歌一首

六四一 絶ゆと言はばわびしめむと焼き大刀のへつかふことはさきくや我が君

湯原王の歌一首

六四二 我妹子に恋ひて乱ればくるべきに掛けて搓らむと我が恋ひそめし

で終るが、贈る、また贈る歌。報へ、また報へ贈るという歌。その中にこめられる「我が背子」と「君」という言葉。
《都合のいい女》で、日本の文学では想像できないような女で、ドストエフスキイが創造するような女である。多分、徹底的に利口な女である。

勿論、大伴家持にもこの様な女はいる。利口な女が傍にいない文学などあるわけではない。

中臣女郎が大伴宿祢家持に贈る歌五首

中臣女郎は不明である。中臣と言ひ、女郎というのだからただの「娘子」ではないだろう。系譜が明らかでない女には不可能な表現ができる。明らかな系譜というのは表現もまた、それに等しい制限としてあるが、正体不明のものは、それ自体の（例えば人間存在自体の）深層（真相）を表わしてくる。

六七五 をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも

六七六 海の底奥を深めて我が思へる君には逢はむ年は経ぬとも

六七七 春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも恋ふるものかも

六七八 直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向かふ我が恋止まめ

六七九 否と言はば強ひめや我が背葎の根の思ひ乱れて恋ひつつもあらむ

うち日さす宮の我が背は

〈否と言はば強ひめや我が背〉菅の根の

〈思ひ乱れて恋ひつつもあらむ〉

というのが、女の特性らしい。〈都合のいい女〉である。多分、家持は女に会って歌人になった。そういう関係を文学というのだろう。

〈娘子〉の歌が並んでいる所がある。

豊前国の娘子大宅女の歌一首

七〇九 夕闇は道たづなづし月待ちていませ我が背子その間にも見む

というのはいい歌である。女の優しさがそのまま出ている。「月待ちていませ我が背子」の絶妙さ。「その間にも見む」の技巧がそのまま心であるような表現。『全集』に「遊女の類か」という。

安都扉娘子の歌一首

七一〇 み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる

丹波大女娘子の歌三首

七一一 鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて浮きたる心我が思はなくに

七一二 うまさけを三輪の祝が斎ふ杉手触れし罪か君に逢ひかたき

七一三 垣穂なす人言聞きて我が背子が心ゆたひ逢はぬころかも

とある、七一一の「浮きたる心我が思はなくに」という表現は、折口風には〈誓約の歌〉で、遊女の作りそのような歌である。

三四八二（東歌）異しき心を吾が思はなくに

三五〇七（東歌）絶えむの心我が思はなくに
遊女の表現の基盤に似ている東歌？

七一二の「垣穂なす」の〈ナス〉表現は特に東歌の世界に近い。〈人言〉も東歌の大きな特質である。

三五〇六（東歌）君が見えぬ此の頃

三五一一（東歌）物をぞ思う年の此の頃

二七四五 湊入りの葦別け小舟障り多み我が思ふ君に逢はぬころかも

三六五〇 ひさかたの天照る月は見へれども我が思ふ妹に逢はぬころかも
は共に作者未詳である。後者は遣新羅使人。

筑紫娘子が行旅に贈る歌一首 娘子字を見島といふ

三八一 家思ふと心進むな風まもりよくしていませ荒しその道

この児島は先にあげた娘子と同一人か？

高安王、包める鮒を娘子に贈る歌

六二五 沖辺行き辺に行き今や妹がため我が漁れる藻伏し束鮒

娘子、佐伯宿祢赤麻呂に報へ贈る歌一首

六二七 我が手本まかむと思はむますらはをち水求め白髪生ひにけり

五年戊辰、大宰少貳石川足人朝臣遷任し、筑

前国の蘆城の駅家に餞する歌三首

五四九 天地の神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで

五五〇 大船の思ひ頼みし君が去なば我は恋ひむな直に逢ふまでに

五五一 大和道の島の浦廻に寄する波間もなけむ我が恋ひまくは

右の三首、作者未詳

五四九の歌は先の娘子（児島）の送別歌に全体的に通うところがある。児島と蘆城駅家の関わりは、大伴旅人の送別に「娘子」の作る歌二首」を思い出させる。

五五〇の歌は、東歌、

三四七七 東道の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相寝とも

三一九〇 雲居なる海山越えてい行きなば我は恋ひむな後は相寝とも

に似ている。この東歌なども送別宴歌として、娘子、遊行女婦などが詠んだものか。

卷九に、石川大夫、任を遷されて京に上る時に、播磨の娘子の贈る歌二首（の中）

一七七六 絶等寸の山の峰の上の桜花咲かむ春へは君し偲はむ

という歌がある。第五句「君乎（之）将思」の両様がある。『全集』では後者「君之」によって、口訳を

あなたは思い出してくださるでしょう

としている。「君乎」でも意味は通る。

藤井連、任を遷されて京に上る時に、娘子の贈る歌一首

一七七八 明日よりは我は恋ひむな名欲山岩踏み平し君が越え去なば

東歌に、

三四七七 東道の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相寝とも

という歌がある。

神亀五年戊辰の秋八月の歌一首 并短歌

一七八五 ……留まり居て我は恋ひむな見ず久ならば

反歌

一七八六 み越路の雪降る山を越えむ日は留まれる我をかけて偲はせ

では、私は恋い慕うことであらう

反歌、私を心にかけて偲んでください

の面様の心情が表現されている。

さて、以上縷述したが、

うち日さす宮の我背は大和女の膝まくごとに我を忘らすな

という歌は国序などにおける送別宴歌ではなかったかと思われる。題詞の形としては、

〈遷任して京に上る時に、娘子の贈る歌〉

であらう。「うち日さす宮の我が背」は宮仕えなさるあなた＝上京する官人、である。「大和女」は都の女性である。

「膝まく毎に吾を忘らすな」は文字通り、膝を枕にする度にも私のことをお忘れにならないでください、である。三四句は当然すぎることに言われるが、送別宴歌、儀礼歌は当然であることしか歌わないだろう。